

みんなで町を自慢しよう

盛りだくさんのイベントがある。それはもういろいろな国からアーティストがやって来る。

多くの方が頼りにしている問屋さんもある。

おいしい店も音楽もギャラリーもあって、世界的なアートフェスティバルも開かれる。

電車に乗れば横浜駅まですぐだし、みなとみらいなら歩いて行ける。

神社のお祭りも盆踊りもあって、参加してみれば町内会も楽しい。

小さな町なのにこんなにすごい町はない。もっとみんなで町の自慢をしよう！

小説家 阿川 大樹

これまでたくさんの方が
かかってくれて
今につながってるんだね



絵：竹本真紀

20周年に

協議会設立から20年間お疲れ様です。今まで色々な世代でまちづくりに取り組み続けてきた20年、行政と県警とNPOと地域住民がこの町を思い続けてきた賜物だと思います。地域住民の私としては行政と県警とNPOの方々に20年間も力を注ぎ続けてくださった事に感謝しかありません。これからも協議会発足当時の思いを忘れる事なく世代を繋いで仲間を増やして健全なまちづくりを次世代に繋いで行きたいです。

日ノ出町町内会 佐野 文昭

思 い の つ ら い

「バイバイ作戦会議」からはや20年が経ち、今でも県警の方が一斉取り締まりのため初黄町内会館で夜を徹し24時間体制で警備をされていたことを鮮明に覚えています。式典に出席して、改めて様々な苦勞の末、今の街になったことを思うと感謝の念に堪えません。私事ながら、新しく生まれ変わった大岡川のほとりを今は亡き主人とハピリを兼ねて四季折々の景色を眺めながら、昔の思い出やほんの些細なことなど、いろいろな話をしながら散歩する幸せの時間を持てたことに重ねて深く感謝します。これからもこの街を地元住民として、孫子の代までも素敵な散歩のできる街、活気のある街であるよう協力していきたいと思えます。

初黄町内会 長門石里子

協議会設立20周年おめでとうございます。協議会、NPO、警察、行政などさまざまな方達の努力もあり、初黄・日ノ出町エリアの状況は、バイバイ作戦のころと比較すると、大きく変わりました。しかし、安全安心のまちづくりが基本であることに変わりはありません。世代交代、組織としての自立、新たな課題への対応など、取り組むべき課題は多いと思いますが、基本を大事にしつつ協議会の活動が発展していくことを祈っております。

横浜市立大学 教授 鈴木 伸治

20年という月日は、人間でいえば、生まれてから成人するまでの時間です。初黄・日ノ出町というまちには、再生を目指して、ようやく成人を迎えました。私がNPOに在籍していた時期は、小規模店舗の借上げが進み、高架下の整備やみなさんと一緒につくる時代でした。以降は、マネジメントの時代ともいえます。次の20年は、このまちに関わる人たちが対話を重ねて、多様な人々が関わり合っているってほしいと願っています。

神奈川県 准教授 上野 正也

協議会20周年に際し、私からは協議会や地域の皆様とにかく感謝を申し上げます。ただ憧れて横浜に来た私に、まちづくりや地域活動のいろはを教えてくださいました。市職員として担当できたことも幸甚でした。この街で実感したのは、まちづくりは何十年スパンでの継続が必要ということです。間違いなく、20年前とは何もかもが大きく変わりました。なので、さらに20年後には初黄・日ノ出町とはとてもない街になっていると確信しています。

前・横浜市都市整備局都心再生課 地域再生まちづくり担当係長 小谷 友介

このたびは、20周年おめでとうございます。この地区を知ったのは、中学1年ぐらいの頃、父親から「見るな、絶対行くな。」と言われ、そんな危ない所が日本にあるのかと、思いました。都市整備局へ配属され、係長で4年、課長で5年、合計9年間地区を担当させていただいた者として、過去の状況からすると現在のまちの姿は、県警の「バイバイ作戦」より前に「環境浄化宣言」を実行した地域の決断力、結束力、実行力の賜物と感服しています。20周年と一口に言っても、ゼロ歳の乳児が成人になる期間を継続して活動されてきたことになり、皆様の地域への思い「地元愛」のなせる業と感じています。この「地元愛」をこれからも大切にしていきたい。次世代を育成しつつ、健全な賑わいを共に創出していきたいでしょう。

横浜市都市整備局都心再生課 地域再生まちづくり担当課長 遠藤 信義

黄金町バザール 2024 開催

本年2024年の3月15日から6月9日までの期間、アートとコミュニティの関係やアジアとの交流をテーマに2008年よりスタートしたアートフェスティバル「黄金町バザール」が、ここ黄金町を舞台に開催されます。15回目を迎える今回のテーマは「世界のすべてがアートでできているわけではない」というもの。現在、そしてこれまでに黄金町に関わりのあったアーティストをはじめ、アジアや横浜、他都市よりアーティストを招聘し、いくつかの章立てに分け多様な表現を紹介していきます。加えて、黄金町のまちづくりの歴史を振り返り、その20年の軌跡を辿ります。



九州と東北で活動するアーティストたち

今回の黄金町バザールに向けて、昨年2023年の春に東北を、秋には九州のアートシーンのリサーチツアーを敢行しました。

東北では福島-岩手-青森-秋田-山形を、九州では福岡-佐賀-長崎-熊本-大分の各県を回りました。美術館や美術大学やギャラリーをはじめ、アートフェスティバルやレジデンススペース、またアーティストのアトリエなどにもお伺いし、それぞれの土地のアートシーンについて沢山のお話を聞きし、アーティストの活動を調査してきました。そうしたリサーチを重ね、「黄金町バザール2024」では九州からは3組、東北からは2組のアーティストを招聘することが現時点で決定しています。今回は、招聘作家の中から、長崎県出身のハシグチリントロウと宮城県出身の井上修志を紹介します。



リサーチ風景

ハシグチリントロウ Rintaro Hashiguchi

ハシグチリントロウは1985年長崎県生まれのアーティスト。戦後の様々な前衛芸術運動、とくに書家・井上有一の「書は万人の芸術」という考えに触発され、「日常を生きる為のエネルギー」としての書を展開しています。筆の代わりにタオルを使って豪快に書き上げる制作スタイルは、10代の頃から彼が愛する「PUNK」の精神に貫かれているといえます。リサーチの旅では、幸運にも彼が制作を行っているアトリエに実際に訪れることができ、その際、作品ができて上がる瞬間を直接目撃することができました。ハシグチは今年の3月末に黄金町を訪れ、公開制作を行う予定です。彼の豪快なパフォーマンスと共に、作品が立ち上がる瞬間を是非お見逃しなく。



制作パフォーマンスを間近で目撃

井上修志 Shuji Inoue



井上修志は1995年宮城県生まれのアーティスト。自身が持つ3.11の経験から社会の脆さや危うさ、また対峙する社会と自然の構造に興味を持ったといえます。これまで公共空間に作品を持ち込み、場所での物理的に規定される事、或いは場所へ依存する作品を多く手掛けてきました。空間が持つ歴史や意味性を紐解き、自らのフィルターを通して現在と接合。日常生活で不要になった物や廃棄物を素材とした彫刻作品やインスタレーション作品を作り上げます。今回の黄金町バザールでは、土地や地域のリサーチを行い、それをもとにした新作を発表予定です。こちらこそ楽しみます。

井上修志 『トンネルの植物は今日も青い』 2023. インスタレーション